



## 【ヨシュア記: 1 人の罪とその代価】

聖書本文:ヨシュア記 7章1-9節/ 今週の暗唱聖句:ヨシュア 1章8節

説教者:鄭南哲牧師

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！先週は台風の中でもみんな大丈夫でしたか。

今日は旧約講解のメッセージ6回目のヨシュア記についての時間です。

前は申命記について申しあげましたが、今日はヨシュア記についてメッセージしたいと思います。

申命記の最後の章である34章によると、モーセはモアブの草原のネボ山で享年（きょうねん）120才で召されました。40年間神様の御手に動かされ、イスラエルの民を導いたモーセは自分の使命を全うした後、神様のもとに行かれたのです。神様に選ばれた指導者モーセは民を約束の地に導いた後、歴史の舞台からおだやかに降りたのです。

ディエルクムディ(D.L.Moody)はモーセの120年間の生涯をこのようにまとめました。

“最初の40年間の間、モーセは自分がえらい者だと思い、後の二回目の40年間を通しては自分は大了なものではないことを知り、その後最後の40年間は何もない自分でさえ神様に用いられるのだということを学ばされました。イスラエルの民を40年間導いて荒野での旅程を終えた後、次は彼の代わりにヨシュアが彼の後継者になったのです。

## &lt;1. ヨシュア記はどんな聖書でしょうか？&gt;

先ほど読んだヨシュア記ではヨシュアがその民を導いてヨルダン川を渡って、カナンに入り、その地を征服し、定着していく歴史が記録されています。24章になっているヨシュア記は2パートで構成されていますが、1章から12章まではカナンの地に入って、カナン人と戦ってその地を征服する7年間の歴史が記録されています。二つのパートは13章から最後の章である24章までですが、征服した地を12部族に分ける約18年間の歴史が記録されています。つまり、ヨシュア記は荒野の生活を終えて神様の約束されたカナンの地に入って征服と土地の配分の25年間の歴史が記録された聖書です。

愛する信仰の家族のみなさん！すべての聖書は神様がどんな方であることを表してくださっていますが、はたしてヨシュア記で表される神様はどんな方でしょうか？ヨシュア記は誠実な神様を表してくれる本だと言われています。神様はイスラエルの民にカナンの地を約束(創世記17:8など)されましたが、40年間の出エジプトの旅を終え、ついにカナンの地に入らせることによってその約束を成し遂げて下さいました。そういうわけで、ヨシュア記はかならず約束を成就される神様の真実さを表してくれるのだと言われるのです。

## &lt;2. 本文の内容&gt;

今日読んだ本文はイスラエルの民がヨシュアの導きのもとでヨルダン川を渡って、カナンに入り、エリコ城を征服した後、またアイというところを攻撃しますが、失敗してしまいます。その失敗の出来事がさきほど読んだ本文の内容です。聖書ではうまくできたこと、もしくは成功や勝利したすばらしい出来事だけ記録されてはいません。罪を犯したり、失敗や恥ずかしい出来事なども記録されています。なぜでしょうか？

失敗の出来事をおしても、神様は我々に何かを教えようとしているからです。聖書ではこのように敗北、恥じの歴史でさえ全部記録されています。これをみると、聖書はただ人間がなにかの意図をもって編集し、修正して作った本でないことがわかります。聖書にこのような敗北の出来事が記録されたことにはこれをおして我々になにか教訓を与えようとしているからです。神様はうまくできる事、成功すること、すばらしいことだけでなく我々の挫折、我々の失敗からも大切な教訓を与えて下さいます。

ヨシュア記7章のアイでの戦いはヨシュア記に記録された最初の失敗の記録です。ヨシュア記では14回の大きい戦争が記録されているし、31部族との対決も記録されています。ところが、今日の本文のアイでの戦いはヨシュア記で記録された唯一の失敗の記録であり、最初の敗北の記録です。この失敗と敗北の出来事をおして神様は我々に何を語ってくださっているのでしょうか。その観点で今日の本文の箇所をともに考えて見たいと思います。

## &lt;3. 問題提議&gt;

本文の7章の始めに‘しかし’という単語が書かれています。つまり、城門が堅く閉じられていたエリコ城は征服したが、アイの城はそれができなかったことを暗示しています。エリコ城を征服した後、イスラエルの民は自慢たらしくベテルの東、ベテ・アベン付近にあるアイを偵察しました。‘ベテル’というのは‘神の家’という意味で‘ベテ・アベン’は‘罪の家’という意味があります。偵察に行ってきた人々が帰って来てこのように報告します。

“アイは小さい城だから、みんなが行く必要がなく、2,3千人だけ行かせても十分攻め取ることができます。”

この報告を聞いてイスラエルの民から3千人だけがアイ城に派遣されましたが、かえてアイの人々からの反撃を受けてイスラエル人が36人が打ち殺され、ほかは逃げて来てしまいます。結局アイ城の人たちからの攻撃で敗北されたわけです。これが本文の内容です。

今日特に、おもしろいのは、神様の臨在を象徴する神の契約の箱、つまり律法の箱があったのにもかかわらず失敗したということです。今まで一度も神の契約の箱がともにいると負けたことがなかったのに、いったい、何があったため、神様の臨在の表示である契約の箱でさえその力を失ってしまったのでしょうか？

今日の本文で気になるもう一つのことはいかに大きくて、難攻不落の要塞エリコ城を攻め取った彼らがそれに比べるともっとも小さなアイの城での攻撃に失敗したということです。事実‘アイ’というところは小さい城であって、標高（ひょうこう）518mに位置した所でした。アイに対する攻撃はむっちゃなことだったのでしょうか？そうではありません。しかし、攻撃に失敗し、その結果“民の心がしなえ、水のようになった”（7:5）と記録されています。失敗がもたらした精神的衝撃は全民族的に大きかったです。イスラエル民みんなこの敗北によって士気がくじかれてしまいました。その意味で、今日の本文は我々が考えてみるべき箇所だと思います。

#### <4. 失敗の原因>

##### (1) 神様と交わらない

イスラエルの民が神様と交わりがなかったことです。まず、本文の前の章に出てくるエリコを攻撃する時の6章2節と比較してみると分かります。6章2節をみるとイスラエルの民はみずからエリコの攻撃に出たのではなく、神様の指示を受けました。しかし、7章でアイ城を攻撃していく場面を見ると、このような神様との疎通（そつう）がありません。彼らは神様の案内を受けるよりかはエリコ城での勝利に気が捕らわれ、自分たちの経験と人間的知恵だけを頼ってしまったのです。‘あれよりもっと大きいエリコ城も征服したなら、あの小さな城くらいは神様の助けなしにも十分攻め上れるだろう。今までおれたちが戦ってきた経験とノウハウがあるんだから。。。’と思ったかも知れません。

そんな心構えでいるイスラエルの民は神様に静まって祈り、神様の導きを求める姿なんかありません。祈りのないむっちゃな挑戦と攻撃、それは失敗が前提されたことでした。祈りのないすべてのことはこれと同じような結果を招きます。今日の本文をただのイスラエル人たちの経験だけでみてはいけないと思います。この本文が聖書に記録されたのは今日の多くのクリスチャンたちに同じく教訓と警告を与えるためなのです。神様に祈らないで、神様の御心がどこにあるのか、神様の計画を求めないで始まったことは決してよい結果を見ることはできないことを覚えて下さい。神様との交わりがないなら、どんなに忙しくても、目の前の結果がどんなに良いとしても、事の結末は神様の御心の通りにならないことを忘れてはいけないと思います。ですから、我々は忙しければ忙しいほど、大切なことはなおさら、もっと祈り、神様と交わりを持たなければなりません。

##### (2) 自慢心

失敗の二つ目の理由はイスラエル人たちの自慢のためでした。7章3節は大切なヒントを与えてくれます。アイを偵察してきた人々が帰って来てこのように報告しています。“彼らはわずかですので、イスラエルの民を全部上らせないで、2,3千人だけ上らせて攻め取らせて下さい。民を全部やって骨折らせる必要なんかありませんよ。”この報告に基づいて彼らは3千人を派遣しましたが、まともに攻撃もできず、アイの人々の反撃を受けます。戸惑ってしまったイスラエルの軍隊は逃げてしまいます。アイ城の征服のための偵察者たちの報告と派兵は大切な一つ的前提があります。つまり、アイ城は小さい所なので、全民族を送らず、2,3千人だけでも攻め上れるという論理はエリコも自分たちの力で征服したという間違った自慢から出た判断だったのです。エリコは難攻（なんこう）不落（ふらく）の要塞でした。考古学的発掘によると、当時、このエリコ城は二重の城壁になっていて、岩石（がんせき）の厚さは2メートルの外側の城壁があって、この外側から5メートル内には約4メートルの内側の城壁になっていて、それともその城壁の高さが10メートルも越えてたので、決して、あんまり武器もなかったイスラエルの民にはとうてい相手すらできないほどの城でした。しかし、ヨシュア記6章を見ると、神様はイスラエルの民に征服の計画を教え、エリコ城を6日（むいかかん）毎日一回（6:3）回り、第七日目はその城を7回回って、祭司が角笛（つのぶえ）を吹き鳴らした時（6:4）、エリコは楽に手に入れることができたのです。しかし、イスラエルの民はこの大勝利の後の恐ろしい自慢が彼らに隠されていたのです。神様の前での自慢心は突然出てきたわけではありません。神様と交わらない時、人間的自慢に陥るしかありません。神様を頼らなければ、人間は結局自分の力だけ頼ることになってしまう事を忘れないで下さい。

##### (3) 一人の不従順の罪

イスラエルの民がアイの攻撃で失敗した一番の原因は‘不従順の罪’のためでした。7章1節によると“アカンが聖絶のものの中から取った”と書かれ、それが神様の御怒りをもたらした確かな原因でした。イスラエルの民の中でアカンという一人の不従順、つまり、エイコを取る前に与えられた神様の命令（ヨシュア記6:17-19）をやぶってアカンは個人的な欲望によって隠しておいたのです。実際、アカンが取っておいた物は大事な物ではないかもしれませんが。（ヨシュア記7:21）しかし、さらに大きい問題はアカンの一人の不従順がほかイスラエルの民を死なせ、イスラエル民全体の戦意を失わせてしまったことです。一人の個人の貪欲（どんよく）が共同体を破壊することができます。アカン一人の不従順という罪がイスラエルという共同体を失敗の谷に導いた大切な原因になったのです。

実際アカンは“シメアルの美しい外套一枚と、銀二百シェケルと、五百シェケルの金の棒一本（ヨシュア7:21）”を隠して置きましたが、生きておられる神様の前で隠すことはできませんでした。戦争や戦いでの勝利は装備の優秀性や作戦の卓越さやすばらしい指導力にありません。神様に心から従っているのか、従っていないのかが勝敗を決めるのだと聖書

は教えて下さっています。これがイスラエルの戦争史（せんそうし）で表される神様の一貫した教えです。不従順が失敗の一番の原因でした。これを**7章11節と12節**でも言われています。神様は従順を教えました、イスラエルの民は不従順したのです。主の御体なる我々のクリスチャンプレイズチャーチもこの教訓と警告を聞かなければなりません。一人の罪はその人で終わるのではなく、その人の家族や、信仰の共同体全体に悪影響を与えることになることを忘れてはならないと思います。ですから、いつも生きておられる神様の御前で自分を探らなければなりません。人はだますことができても決して生きておられる神様をだますことはできないし、隠すことができないことを覚えましょう。クリスチャンは神様の前でいつも恥ずかいとなく、隠すところがない生き方であるべきだし、主の教会がこのように信仰によって生きる時、主の教会はさらに祝福されると信じます。

### <アカンの罪によって:イスラエルの罪?>

罪を犯したアカンは一人ですが、アカン一人だけの罪にされてないことが今日の本文の内容です。**7章1節**では、“**主の怒りはイスラエル人向かって燃え上がった**”**11節**でも同じく“**イスラエルは罪を犯した**”とされています。罪を犯した人はアカンですが、一人の罪にしてないことです。つまり、共同体的連帯を見せてくれます。一人の従順は我々みんなを祝福させ、我々をも勝利させます。逆に一人の不従順は我々を失敗に導きます。一人の従順は我々をも生かしますが、一人の罪は我々を殺すことも、共同体を破壊することもできる事を、今日の御言葉からの警告を通して教えられました。

### <アカンの罪をとおして:一人の罪の結果-アカンの家系>

二つ目、犯罪はアカン個人ですが、またそれだけで終わらされないことです。もう一度**7章1節**をみてください。アカンについてどう説明されていますか？“**ユダ部族のゼラフの子ザブディの子であるカルミの子アカン**”と書かれています。神様はアカンの家系を取り出してその祖父の父からその名前を公開しています。我々とは違ってイスラエルのヘブル人たちには性がありません。ですから、ある人を言う時、その人の父の名前を同時に持ってくる風習がありました。**エフネの子カレブ**、**ヌンの子ヨシュア(民数記14:6など)**のように誰の子なのかを表します。新約でもイエス様がペテロについて言われる時、“**バルヨナ・シモン(タイ16:17)**”と言われたことがあります、‘**バル**’という言葉はだれだれの子という意味ですので、‘**バルヨナシモン**’ということは‘**ヨハネの子シモン**’という意味です。

ところが、みなさん！アカンを言う時、その先祖たちの名前を長く並べた理由は为什么呢？アカンの罪がその父と祖父となにかの関係があることを暗示しているのでしょうか。**7章24節**をみると、アカンだけではなくその家族全員が殺されました。家族だけではなく、彼に属されていた動物さえも同じくされました。家族関係は生物学的関係それ以上の意味があることを示してくれます。アカンの罪に対して、彼の父カルミも責任があり、ザブディも、ゼラフも部分的に責任があるということです。従う生き方は突然されるものではありません。訓練が必要です。家庭教育、信仰の教育による訓練が必要なのです。つまり、アカンの家庭では神様に従う信仰の訓練ができなかったわけです。これはこんにちの我々にも、子供たちに対する霊的責任があることを教えてくれます。この責任こそ親である我々に与えられた一番大切な責任ではないかと思えます。

### <まとめ>

愛する信仰の家族のみなさん！ヨシュア記は始めに申しあげたように神様の真実さを表してくれる聖書です。神様は先祖たちにカナンの地をくださると約束されましたが、その約束を守ってくださいました。人間の繰り返される不従順と不信仰にもかかわらず、ご自分をカナンに導き入れ、その地を勝ち取らせました。神様はかならず、その約束を守る方です。同時に、数多くの戦いと熾烈な戦いにおける勝利は装備の優秀性や作戦の卓越性、指導力ではないことを表してくれます。すべての戦いは神様の御手にあります。神様に対する従順は我々を勝利へと導く祝福の道です。それにもかかわらず、我々が神様に従えないのは目の前にあるわずかな利益、わずかな物質への欲を捨てられないからである事を今日の箇所を通して学ばされました。神様を信じて、従えば、それよりさらに大きい、そしてさらに良いものを得られるのに、それを見れないで、目の前にあるわずかな利益のため不従順の道を選んでしまったアカンにならないように気をつけましょう。ヨシュア記を通して出エジプト後イスラエルの民に絶対従順を教えてくださいました理由が説き明かされています。イスラエルの民はカナンを征服することで合計31カ国の軍隊と接戦しました。3回の大きい戦いもありました。このカナンの征服の歴史をとおして、神様の導きに従うことこそ勝利への秘訣である事を教えられました。

今日も、生きておられる神様の御前でこのメッセージに対する我々の応答は単純です。アカンのようではなく、主の導きに最後まで従いとおしたモーセのような生き方によって約束された神様の恵みと祝福をいただくクリスチャンプレイズチャーチのみなさんとなりますよう主の御名によって祝福します。アーメン！